

飯舘村放射能エコロジー研究会・
東京シンポジウム
『原発災害と生物・人・地域社会』
2013年3月30日(土)
東京大学農学部弥生講堂一条ホール

原発災害とリスクコミュニケーション

東京大学大学院新領域創成科学研究科
鬼頭秀一

「環境リスク」という考え方の登場と社会的意味

- 化学物質等の健康影響の問題を「**環境リスク**」として捉える
- **リスク・ゼロ(ゼロリスク)ではなく、コスト等との関係の中で分析するべきものとして捉える**
 - **リスクを逡減化するための労力や経済的コスト**を考えることの必要
さまざまなリスクに晒されている状況の中で、**どのリスクの逡減化を優先するのか、それをどの程度行うべきか、全体のリスクを管理していくことの必要性**
- **あらゆるリスクを避けることができないという前提**の中で、**特定のリスクをある程度受け入れることを前提に(リスクテイク)、その全体を管理することこそが必要だという考え方**
- ある種の、ある程度のリスクを受け入れることを前提にするという考え方が、**ある種の人たちに、リスクの受容を強要することにもつながり兼ねない**
 - 狭い意味での経済性の視点から環境リスクを可能な限り低く見積もり、一般の人たちを「安全」側に「説得」し、リスクに関する科学的なリテラシーを身につけるべく「教育」して、比較的高いリスクに関して寛容になることを意図するような考え方に陥っていく危険性

リスクコミュニケーション概念の登場と変遷

- 環境リスクのリスクマネジメントとリスクコミュニケーション
- 関連する当事者たちの間でリスクをどう認知し、どの程度受容し、相互理解の上でどう管理していくのか＝「リスクコミュニケーション」
- 1980年代における化学物質や原子力発電に関するリスクに関する議論
- 古いタイプのリスクコミュニケーションは、「説得」？「教育」？
- 「説得」や「教育」、古いタイプのリスクコミュニケーションは効果がない（米NRC報告、1989年）
- 「個人、機関、集団間での情報や意見のやりとりの相互作用的过程」
「環境リスクに関する情報を、市民、産業、行政等のすべてのものが共有し、意見交換などを通じて意思疎通と相互理解を図ることで、環境リスクを減らす取り組みを進めるための基礎となる」（環境省）

放射線被曝に関するリスクコミュニケーションの問題

- 日本の放射線の健康影響の研究領域では、1990年代から2000年代にかけて、「説得」と「教育」による「リスコミ」が中心的に論じられてきた。(島藺進(2013年))
- **1995年の「もんじゅ」の事故以来**、「安全」と区別される形で「安心」が論じられる(高木仁三郎の指摘を島藺が評価)
 - 「安全」=科学的な領域 =リスク分析・リスク管理の対象
 - 「安心」=住民・市民の主観的な領域=リスクコミュニケーションの対象
- 「不安」を取り除き、「安心」を得るものとしてのリスクコミュニケーション
- 「安全・安心」という枠組みが完成する
- 1980年代に高まった反原発運動を踏まえて、原子力業界が、メディア対策や教育への深い関与により原発の安全神話を社会的に構築していった時期と相応

福島第一原発事故以後の「リスクコミュニケーション」

- 放射線の健康影響に関する議論は、「安全」側に大きく偏った形で「説得」「教育」を主体とした「リスコミ」が大きく席卷
 - 長崎大学医学部 長瀧重信—山下俊—高村昇
 - 放射線医学 中川恵一
- 「正しい」(と専門家本人が思っている)知識とそれに基づく判断を伝えようとする=「リスコミ」から「スリコミ」!!へ
- 受動喫煙、野菜不足、CTスキャナー、避難のリスクと比較「放射線被曝のリスクの方がより低い」という専門家の信念「安心してもらう」ことが「妥当」
⇒過度な「パターナリズム」の横行
- 被災地の住民の人々を大きな不信と対立の下に陥れ(1989年のNRCの報告書の指摘)、放射線被曝の逡減化どころか、身体的にも精神的にも大きなリスクを抱えざる得ないところに追込み

リスクコミュニケーションの二つの課題

- パターナリズム＋欠如モデル
- リスクや判断における多元性

パターンリズム

相対的に権力や知識を持っている者が、
それを持たない弱い立場にある者の利益になるようにと、
行動に介入・干渉すること、
それはしばしば、本人の意志に反することにもなる
従来型の古いタイプの医者と患者の権力関係
患者の自己決定を実現させるという視点から問題視
「家父長主義」、「父権主義」、「温情主義」、「家父長的温情主義」

「リスコミ」から「スリコミ」への転落 リスクコミュニケーションのパターナリズム的陥穽

- 「正しい」(と本人が思っている)知識と
それに基づく判断を伝えようとすることは
「リスコミ」ではなく「スリコミ」!!
- 「避難のリスクより放射線被曝のリスクの方が低い」
という専門家の信念を伝えて、「安心してもらう」こと
が「妥当」という、過度なパターナリズムの横行
- 白衣に聴診器で講演するという、
医師－患者関係のパターナリズムを
体で表現したようなパフォーマンスまで

「欠如」モデルに基づく「教育」的「リスコミ」

- 一般の人々が科学技術(やそのリスク)を
受容しないことの原因は、科学的知識の欠如にある
専門家が人々に知識を与え続ける(「**説得**」と「**教育**」)ことで、
一般の人々の科学受容や肯定度が上昇するという考え方
- **放射線への「不安」**は、放射線や放射線被曝に関する
科学的な知識が一般の人において欠除されているため
- 「正しい」科学的知識を「教育」することにより、
人々の「科学的リテラシー」を高めることが、
放射線被曝に対する「不安」を取り除くもの
- 「欠如モデル」に拠った「放射線教育」という名の「リスコミ」
- 「**誤解**」=放射線や放射線被曝に関する
誤った理解を解消すべく、「教育」や「説得」が必要
- 「**誤解**」という言説による、**多元的な判断の切り捨て**

「誤解」という切り捨て方——欠如モデルの一形態

- 「誤解」の根拠になっている科学的知識の不確実性をどう捉えるのかという問題は残る
- 「科学」的な観点から明らかに「誤解」であったとしても、「誤解」されることには、それなりの理由がある
- 人間の判断には多元的な形でなされており、科学的な根拠が大きな役割をもっているが、だからといってそれがすべてではない。
- 「誤解」という言い方は、判断において、科学的な見方と違う見方もあることを切り捨ててしまう
- 不安を持つ理由、根拠をライフヒストリーも含めたその人の個人の全体的な観点から捉えて理解する必要がある
- 「誤解」といういい方は、「科学」的に「正しい」理解ができていないという意味で、一種の「欠如モデル」に基づいた言い方であり、それゆえ、科学的リテラシーの「教育」「説得」の対象としてしか見ておらず、その個人の全体的な観点を理解せず、切り捨てられているようにも思われる

専門家の方にいくつかの誤解があった⇒住民は分断された

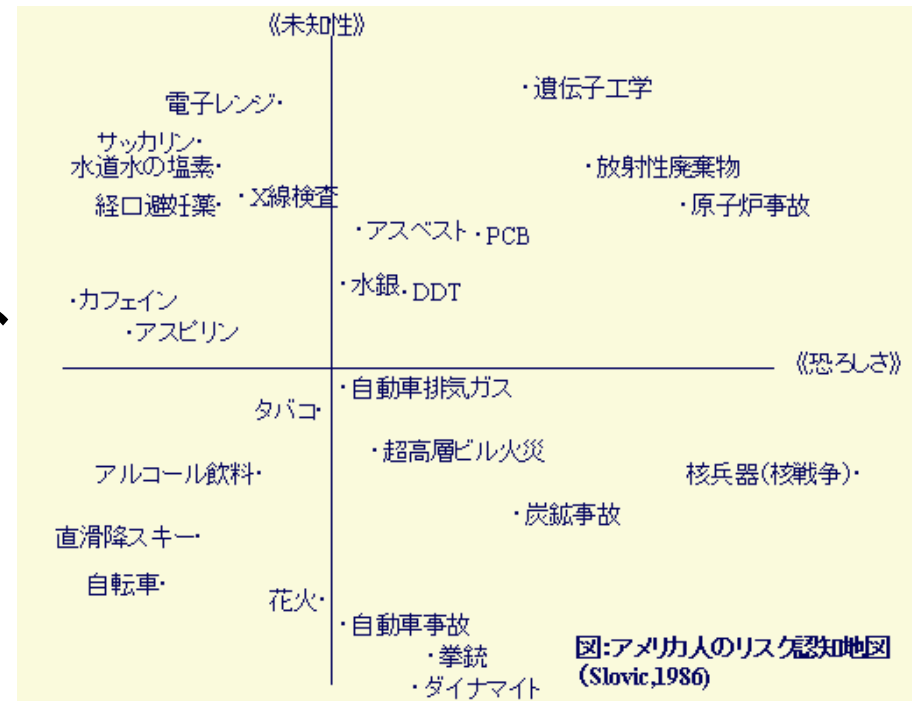
- 「安全だ」という「正しい」(と専門家が考える)
知識と判断を伝達すれば、住民は「安心する」という誤解
 - そもそも、住民は安心したいのではない。
適切な知識を得て自分で判断したい。
「本当のことを知りたい」!!
 - 専門家が「正しく」説得すればするほど、不信感は募る
 - このことは1989年にNRCがすでに明らかにしていたこと

専門家の方にいくつかの誤解があった⇒住民は分断された

- 「避難するか」「留まるか」の判断は、「避難するリスクより被曝のリスクの方が高い」「被曝のリスクより避難のリスクの方が高い」という単純なリスクの比較という論拠でなされるはずだという誤解
 - 実は、住民の人たちはもっと複雑な社会的な状況で判断していることで、リスクの論拠を押しつけられても、それで納得できるわけではない
 - 被曝のリスクより避難のリスクの方が高いから留まるべきだという過度なパターンリズムの判断は、住民を困惑させるだけ
 - 結果的に、リスクの判断で住民の心を分断してしまった

リスクの多元性を理解することの必要 ——それは多様な生き方を認めること

- リスクの認知において、
「破滅性」「未知性」「制御可能性」
・「自発性」「公平性」「信頼性」
「主要価値類似性」などという
さまざまな要素が関係しており、
多元的なものとして捉えるべき
一元的に捉えてはいけない



HSEリスクシーキューブから引用
<http://hse-risk-c3.or.jp/rc/rc2145.html>

リスクの多元性を理解することの必要 ——それは多様な生き方を認めること

- 中西準子「環境リスク論」の「損失余命」を軸にした一元的风险分析に限定しすぎた
- 中西環境リスク論も放射線被曝に関しては異なる議論
- 放射線被曝のリスクと避難のリスクを一元的に比較することはできない
(これはある意味では当たり前のこと)
- 喫煙のリスク、野菜不足のリスクなども、放射線被曝のリスクと一元的に捉えて比較することは誤り

リスクの多元性を理解することの必要 ——それは多様な生き方を認めること

- **ひとは、そもそも、一元的なリスクを判断して生きているのではない。**
多様な社会的な要素を鑑みて
そのときそのときの状況で判断して生きている
- そこに、放射線被曝に関して、「安全」とか「危険」とかそのような一律の価値観を押しつけても困惑するだけ
- 避難していなくとも、専門家に対する不信感で
「本当のことが知りたい」と思い続けなければならないところに
追いやられて、精神的に疲弊している現状をもっと直視すべきである
- 「本当のことが知りたい」というのは、「正しい(と専門家が思っている)科学的知識を得て安心したい」という意味ではない。
「自分で判断できる知識を得て、自分で納得したい」ということ

放射線被曝のリスクが重層的に多元化していくことをどう捉えて「リスク」を捉えるのか

- 放射線被曝の「リスク」「被害」は、単に医学・生理学的な領域に留まらない精神的なもの、人格的なもの(差別等も含む)、コミュニティに対するもの(人間関係も含む)など、重層的に重なり合った多元的なものとして存在している
- 医学・生理学的に、「安全」か「危険」か、「病気」になるのか、ならないのかという問題はほんの一部にすぎない。
- 病気になるのかならないのかという形でリスクを矮小化し、限定していくことによって、精神的なものも含めた「健康」や、生活再建の問題が十分に捉えられない
- 重層的で多元的な形で「被害」や「リスク」が存在することを前提にしたリスクコミュニケーションが必要になってくる

政策的枠組みとリスクコミュニケーション

- 現在の政策的枠組みの限界
 - 除染による放射線量の逡減化
 - ⇒ある程度低下した放射線量の地域への帰還と放射線被曝のリスクの受容
 - ⇒「説得」と「教育」の「不安」解消としての「リスコミ」
 - 「除染」の限界
 - 若い人たちが帰還しないようなコミュニティの復興、生活再建はあるのか、「復興」の意味の捉え返し
 - 「説得」と「教育」の「不安」解消としての「リスコミ」の見直し
- 新たな政策枠組みの中でのリスクコミュニケーションの必要
 - 精神的なものも含めた「健康」の保証、取り戻しと、より広域的な意味でのコミュニティの復興、文化的アイデンティティのミティゲーション、全体的な政策的枠組みの中での、広い意味での放射線被曝リスクの逡減と解決

リスクコミュニケーションを自己目的化しない ——リスクガバナンスのためのもの

- **放射線被曝のリスクの見える化**
——生活域等での細かいメッシュでの測定と共有の必要
- **健康管理システムによって、放射線被曝を自分たちで管理できるシステムが必要**
- 上記の二つの条件が整って始めて
リスクコミュニケーションは意味を持つ
- **住民自らがリスクをガバナンスできる体制を専門家が支え、手助けしていくことが重要**
- 可能な限りリスクを逡減化していくことの重要性
– Alaraの原則 (As Low As Reasonably Achievable)

中川プロジェクトに対する軌道修正は可能か

- 科学技術振興機構(JST)「原子力基礎基盤戦略研究イニシアティブ」「原子力と社会の関わりに係る 人文・社会科学的研究」「原子力と地域住民のリスクコミュニケーションにおける人文・社会・医科学による学際的研究」(研究代表者、中川恵一)(2012年10月～2015年9月)
- 大規模原発事故後の望ましいリスクコミュニケーションのあり方を求めるため、福島県の地域住民(とりわけ飯舘村民)を対象としたリスクコミュニケーションの現状把握と、主として医学的・心理的な視点からのコミュニケーションスキルの評価を行い、低線量被ばくについてのリスク情報が受け取られる際の文脈を解明する。



【パネリスト】

研究代表者

- ・中川恵一 (Keiichi Nakagawa)
東京大学医学部附属病院放射線科・緩和ケア診療部(放射線医学)

研究分担者

- ・佐倉統 (Osamu Sakura)
東京大学大学院情報学環(科学技術社会論)
- ・高村昇 (Noboru Takamura)
長崎大学大学院医歯薬総合研究科(国際保健学)
- ・伴信彦 (Nobuhiko Ban)
東京医歯薬保健大学東が丘看護学部(放射線影響・放射線防護)

【コメンテーター】

- ・鬼頭秀一 (Shuichi Kitoh)
東京大学大学院新領域創成科学研究科(環境倫理学)
- ・田中淳 (Atsushi Tanaka)
東京大学大学院情報学環(防災情報)

【日時】

2013年3月23日(土)
13:00-17:00

【会場】

福島テルサ
中会議室「あづま」(福島市上町4番25号)

定員100名(参加無料・事前申込不要)

福島と日本を 飯舘から 考える

復興支援に関する
医学と人文社会科学からの
アプローチ

プログラム

開会挨拶

13:00 中川恵一(東京大学医学部附属病院放射線科)

第一部「地域医療とリスクコミュニケーション」

13:10 伴信彦(東京医歯薬保健大学東が丘看護学部)
「飯舘村での放射線リスク・コミュニケーション」
13:35 コメント
「避難地域における医療と保健」
13:50 質疑応答

第二部「科学技術と社会」

14:10 佐倉統(東京大学大学院情報学環)
「地域社会における専門家の役割」
14:20 鬼頭秀一(東京大学大学院新領域創成科学研究科)
「リスクコミュニケーションと専門家の役割」

14:30 【討論】鬼頭秀一・佐倉統

コメンテーター：田中淳(東京大学大学院情報学環)

15:00 質疑応答

15:10~15:30 休憩

第三部「放射線医学とリスクコミュニケーション」

15:30 中川恵一(東京大学医学部附属病院放射線科)
「放射線のリスクとコミュニケーション」
15:55 高村昇(長崎大学大学院医歯薬総合研究科)
「チェルノブイリから福島へ」
16:20 質疑応答
16:30 総合討論
司会：中川恵一(東京大学医学部附属病院放射線科)



【主催】

文部科学省原子力基礎基礎研究イニシアティブ
「原子力と地域住民のリスクコミュニケーションにおける
人文・社会・自然科学による学際的研究」

【問い合わせ先】

東京大学医学部附属病院緩和ケア診療部内
(kuroda@ie.u-tokyo.ac.jp)

「村」のための「医者」になれるのか？

- 医師—患者関係的なパターンリズムの変形として、
「村」のためのパターンリスティックな「医者」となることの問題
- 対象（患者）によっては、パターンリスティックな「医者」の役割は
正当化できるのか？
- パターンリスティックな医師—患者関係が許される場合は、
パターンリスティックな責任ある対応ができるほど、
患者の日常生活に対して目を配り絶えず対応できる体制があったとき
- 「村」を対象にしてしまうと、集合的な「患者」の日常生活に対して
目を配ることもできず、責任が持てなくなる
- 高線量のイノシシの肉を高齢者が食べることのリスクと、猟をしてそれを食
べる喜びを奪われるリスクを比べることができるのか？「少くくはいはい」
ということの管理を誰がやるのか？孫に食べさせてしまうリスクをどう責任
をとるのか？WBCの値の二極化（市場によらない狩猟や採取で取ったもの
を日常的に食べる人たちのリスクをどう考えるのか？）

放射線被曝に関するリスクコミュニケーションの転換

- 狭い意味での医学・生理学に限定したリスクコミュニケーションから、精神的なものも含めた健康被害、生活被害に対するより広域的な生活支援も含めた形へと転換
- 狭い医学・生理学的な健康被害に限定して安全論や危険論を展開すること自体が問い直されている
- より広域的な形の新たなリスクコミュニケーションの枠組みの中でも、放射線被曝の位置づけが大きな問題となる
- しかし、放射線被曝の問題がより広域的な健康・生活被害の中で相対的に低く捉えていく可能性がある⇒**危惧**
- 精神的なものも含めた健康被害、生活被害の根底にあるのは、放射線被曝の問題があり、それを根底において、放射線被曝の見える化、主体的な健康管理システムの構築を基礎に置いた上での生活再建とリスクコミュニケーションが必要になってくる

今後の展望

- 今まで、専門家の「説得」と「教育」が住民の人たちを、結果的に分断化してしまった専門家の役割が問われる
- 「除染」の問題を含めて、国の政策オプションが変わりつつある兆しがある現在、住民の人たちの安全を守り、長期的スパンに立った、村の復興のあり方を問いなおしていく時期にあって、リスクコミュニケーションや専門家の役割がますます問いなおされる
- 若者が村の伝統的なものの掘り起こしをする動きがあり、また、味噌の里親プロジェクトなどのように、村の伝統的なものを大事に育てていき、村の文化の重要性についてそれを気づき、長期的な視点で育てていくような動きが活発化している中で、精神的、文化的なものも含めた村の復興という課題が明確化しつつある現在、その中でのリスクコミュニケーションのあり方はますます意味をもってくる

寺田寅彦の「正當にこわがる」を再評価しよう（「正しく怖がる」ではない）

一度浅間の爆発を実見したいと思っていた念願がこれで偶然に遂げられたわけである。浅間観測所の水上理学士に聞いたところでは、この日の爆発は四月二十日の大爆発以来起こった多数の小爆発の中でその強度の等級にしてまず十番目くらいのものだそうである。そのくらい的小爆発であったせいでもあろうが、自分のこの現象に対する感じはむしろ単純な機械的なものであって神秘的とか驚異的とかいった気持ちは割合に少なかった。人間が爆発物で岩山を破壊しているあの仕事の少し大仕掛けのものだというような印象であった。しかし、これは火口から七キロメートルを隔てた安全地帯から見たからのことであって、万一火口の近くにでもいたら直径一メートルもあるようなまっかに焼けた石が落下して来て数分時間内に生命をうしなったことは確実であろう。

十時過ぎの汽車で帰京しようとして沓掛駅で待ち合わせていたら、今浅間からおりて来たらしい学生をつかまえて駅員が爆発当時の模様を聞き取っていた。爆発当時その学生はもう小浅間のふもとまでおりていたからなんのことはなかったそうである。その時別に四人連れの登山者が登山道を上りかけていたが、爆発しても平気でのぼって行ったそうである。「なになんでもないですよ、大丈夫ですよ」と学生がさも請け合ったように言ったのに対して、駅員は急におごそかな表情をして、静かに首を左右にふりながら「いや、そうでないです、そうでないです。——いやどうもありがとう」と言いながら何か書き留めていた手帳をかくしに収めた。

ものをこわがらな過ぎたり、こわがり過ぎたりするのはやさしいが、正當にこわがることはなかなかむづかしいことだと思われた。

（寺田寅彦「小爆発二件」『文学』1935（昭和10）年11月）